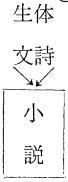
連句が、古の殻を冠つて、近代的に脱皮するのが難しいなら…と考えた彼は、連句論から、一新体詩である俳体詩の創作に情熱を傾け、俳体詩論をブツた。それは俳諧趣味を基にして写生すると言う考え方であつた。その俳味は「非情熱趣味、微温湯趣味」等と呼んでいた。

そこで彼は漱石を引つ張り出して俳体詩を作つた。理論の実践化である。俳体詩の制作も三ヶ月程で終り、漱石は、気分転換に書いた文章が「ホトトギス」で好評を得、文章に興味を持ち、大学教授をやめてしまつた。虚子も多忙で活動が出来なかつた。

「写生文に於ては遙かに漱石の先輩を以て任じていた私達も、大河を決するが如き、漱石の多年の蘊蓄を一時に傾け尽した創作熱には、非常な刺激を受けたのだつた。」と虚子は述懐している。その漱石は、三重吉宛の書簡の中に、「僕は維新の志士の如き烈しい精神で文学をやつてみたい。」と語りかけている。

ここで初期に小説家の夢を描いていた虚子は、俳句のとり上げる世界の狭さを自覚していたし、変化と自在を希求していたし、前述の漱石等の動き、特にその成功を目のあたりに見た事もあつて、内面的な衝動に加えて、直接的な刺激を受けて、小説家たる事が実現したものと言える。

輪廓を図示すると



の様な道筋になると言える。「風流懺法」「大内旅館」等は、その道を辿つて出来上つた小説であつた。漱石の評にもある如く、虚子の小説は、俳諧趣味の、せつぱつまらない特色を持つていた。

結局、虚子の小説は、子規の規定した所の俳句の特性を承けて、それを虚子風に展開し、自然主義文学と対峙する性質の小説として文学史的位置をかち得たものであつた。

虚子の俳句から小説への道、それが、どの様な歴史的展開を辿り、どの様な文学的理由によつたかは以上の如くであつた。

川端康成の文体

―文章心理学による統計的考察―

磨井　美穂子

はじめに

「心理学は、人間の精神を探究する学問である。そして、文学は、人間の精神によつてうみだされたものである。」[1]といわれるように文学が、心理学の対象になりうることは、明らかである。

文章の性格の心理学的研究は、日本では明治期のおわりから試みられているが、人間の性格の心理学的研究の進歩にくらべて、ひどく遅れている。心理学者安本美典氏は、最近あたかもその遅れを補うように『文章心理学の新領域』でユニークな研究法をしめされた。特にその『文章の性格学への基礎的研究』において、現代作家一〇〇人を選び、代表作を一篇ずつ採り、文章の性格特性と考えられる項目について調査し、その項目間の相関を因子分析し、それに関連しながら主要な項目の標準尺度をつくり、因子の内定を決定した上で、それらの結果をもとに、現代作家文章をいくつかの性格類型に分類をされている。しかし安本氏の研究では、各作家の代表作一篇をもつて、その作家全体を論じていられる感をまぬがれない。

調査の対象になつた作品は、作家の前期の作品であつたり、中期あるいは後期の作品を選ばれた作家もある。作風の上にめざましい変化とか本質的な展開が見られない作家もいるが、どのような作家でも技巧の熟練とか心境の深化という事は考えられる。それは統計的手法を利用すればどのような結果を示すだろうか。その試みの一つとして、本稿私は文章論上よく問題にされる川端康成をえらび、川端の作品を安本氏の調査対象になつた『雪国』を境にして、それ以前の作品と、それ以後の作品にわけ、その文章の性格分類をおこない検討してみたい。

一、創作期間の区分

『雪国』を対象に安本美典氏は、その著[2]において、川端康成を文章の性格から、A因子の低い、B因子、C因子の高い「用言——修飾——会話型」の作家であるとされた。

川端康成は、横光利一のように現代の文章の変遷史を辿つてきた作家といわれる。ここでは、『雪国』以前の比較的前期の作品又は後期の作品においても、A因子の低い、B因子、C因子高い作家であるといえるかどうか因子分析をしてみてゆくわけである。

テキストには、安本氏と同様筑摩書房版『現代日本文学全集』を用いた。この『川端康成集』（以後『康成集』と略す）には、『十六歳の日記』『伊豆の踊子』『温泉宿』『死體紹介人』『抒情歌』『禽獣』『虹』『雪国』『愛する人達』『再会』『再婚者』『千羽鶴』『山の音』合計十三の小説が収録されている。

川端の作品を、前期、中期、後期の創作期間にわけることは、きわめて困難である。発表年代を基準にしても、これらの作品には、発表年代が断続的なものが数篇あり一概にわかたれない。

しかし事実上の処女作『十六歳の日記』（大正三年）[3]から『山の音』（昭和二九年）に至る創作期間四〇年を『雪国』を境として三区分した。即ち、『十六歳の日記』から

『虹』の期間は、ジョイス、プルーストの新心理主義の影響を受けた作品もあるが、新感覚派的な感覚的文章表現が多いし、『雪国』は新感覚派的文章と心理主義的な文章の織りなす作品とし、その後新感覚派的表現より心理主義の方に傾いていつたとして、『雪国』以前の作品を前期作品π'_1『雪国』を中期作品π'_2、それ以後を後期作品π'_3としてその創作期間を区分した。

創作期間の区分にあたり、山本健吉氏の『川端康成の人と作品』、長谷川泉氏の『康成と利一』（『解釈と鑑賞』昭和三十二年二月号）、高田瑞穂氏の『康成と辰雄』（同上）を参考にした。

二、母集団および部分母集団[1]（統計的模型 Statisticalmodels の設定）

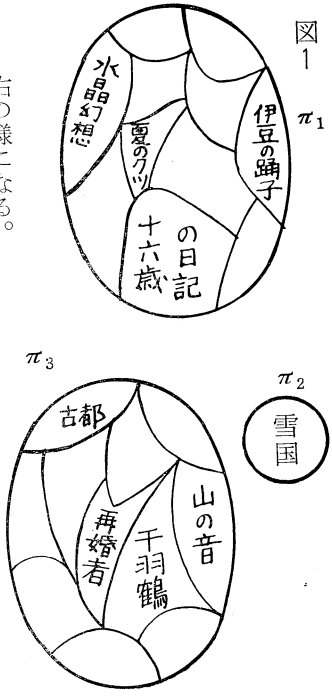
㈠ 母集団

川端康成の前期作品を第Ⅰ母集団π_1（パイワン）

『雪国』のみを第Ⅱ母集団π_2

後期全作品を第Ⅲ母集団π_3と名づける。第Ⅰ母集団は、前期の個々の作品（これ等を第Ⅰ母集団π_1での層と呼ぶ）全体からなつている。第Ⅲ母集団π_3は、後期の個々の作品（これ等を第Ⅲ母集団π_3での層と呼ぶ全体からなつている。図示すれば、

図1

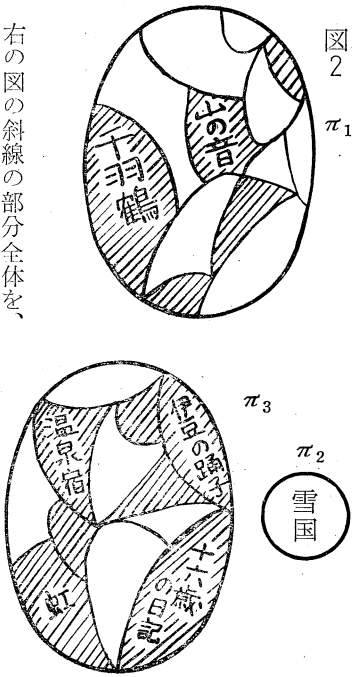


右の様になる。

㈡ 部分母集団

『康成集』に掲載されている個々の前期作品というπ_1での特定の層の集まり全体をπ_1の部分母集団π'_1とする。そして私達は、π'_1をあたかもπ_1の忠実な縮図のように考え、π_1の代用品と考えよう。即ち『康成集』に掲載されている七個の作品をあわせたものが、前期全作品の忠実な縮図となつているものと仮定する。同様にして『康成集』に掲載されている個々の後期作品というπ_3での特定の層の集まり全体をπ_3の部分母集団π'_3とする。そして私達はπ'_3をπ_3の忠実な縮図と考え、π_3の代用品と考えよう。即ち、『康成集』に掲載されているX個の作品をあわせたものが、後期作品全体の代表選手である。と仮定しようというわけである。これを図示すれば次の様になる。

図2



右の図の斜線の部分全体を、全体の縮図と考えようというわけである。

三、標本の抽出(4)(層別比例抽出法による標本の抽出)

まず標本の大きさを安本氏(2)に従つて、二〇段と定めておく。π_1の部分母集団π'_1を構成している各層(それらは『康成集』に掲載されてる前期作品である)から、各層の大きさ(即ち各作品の頁数)に比例した大きさの段数を、各層(即ち各作品)から、無作為に抽出し、そのようにして抽出された二〇個の段を全部集めて、それを部分母集団π'_1からの、従つて前節の仮定によつて母集団π_1からの任意標本と考えようというわけである。このような標本の抽出法を層別比例抽出法という。

母集団π_2(『雪国』)からは、無作為に二〇の段を抽出して、それをπ_2からの無作為標本とする。ただし、各層(即ち各作品)から、その層の大きさに比例した個数の段を抽出する場合には、その作品の最初の段から、最後の段まで、一連番号をつけ、それらの番号の中から短形型乱数表を用いて(4)、上に指定された個数の番号を無作為に抽出し、抽出された番号をもつた段を抽出するようにする。具体的な抽出方法について述べれば、つぎのようになる。

『十六歳の日記』は一〇頁からなつておりπ'_1における割合、その頁数は一割を示し、従つて、π'_1から二〇段抽出のためこの作品からは二段の抽出となる。以下同様の方法で抽出した。表にあらわすと、次の様になる。

表I　各層から抽出される段の個数決定

層(作品)名	π'_1		
	頁数	割合	抽出段数
十六歳の日記	10	1	2
伊豆の踊子	11	1	2
温泉宿	17	2	4
死體紹介人	22	2	4
抒情歌	11	1	2
禽獣	10	1	2
虹	20	2	4
合計	101	10	20

層（作品）名	π'_2		
	頁数	割合	抽出段数
雪国	40	10	20
合計	40	10	20

層（作品）名	π'_3		
	頁数	割合	抽出段数
愛する人達	56	2.5	5
再会	9	0.5	1
再婚者	29	1	2
千羽鶴	48	2	4
山の音	102	4	8
合計	244	10	20

四　調査方法

㈠　名詞、漢字、人物、句点、読点の各項目については、二で抽出された各母集団よりの標本、即ち抽出された二〇個の各段で最初の五〇字ずつを採用する。この場合、会話文も含める。

全部で二〇段あるので、従つて抽出されたのは、全部で一〇〇〇字である。その一〇〇〇字の中での各項目についての該当個数を調査するわけである。

㈡　色彩語、直喩、声喩、会話文の各項目については、「二」で抽出された各母集団よりの標本即ち抽出された二〇個の段全部を調べて、それらの項目毎に該当個数を調べるわけである。

㈢　文章の長さという項目については、抽出された二〇個の段において、各段で最初に出てくる文章を一つずつ、従つて合計二〇個の文章を調べて、その二〇個の文章の各々の長さ（即ち字数）の算術平均値を計算して、文の長さとする。

㈣　過去止、現在止、不定止の各項目については、文章の長さの項目と同様に抽出された二〇個の段において、各段で最初に出てくる文章を一つずつとり、文章の最後が過去止か現在止か不定止かを分類し統計する。

㈤　以上十三項目の調査にあたり、安本氏の調査規準に従つた。それを具体的に示してみよう。

尚、実際の調査にあたり、安本氏の著では、規準が不明確な所があつた。そこは、安本氏の『文章心理学の新領域』と波多野完治氏の『文章心理学』を参考にして、規準をたてた。（以後その部分はスター印「★」で示す）

(1)直喩――直喩としては、次のようなものを数えた。

「稗史的な娘のやうな感じだつた」

「踊子は火がついたやうにはしやいで」

このように「……のような」「……のごとし」という形式の比喩を採用した。[5]

文法書によると、比況の助動詞「ようだ」「ごとし」は(イ)「たとえて言う」場合と(ロ)「不確実な断定」(ハ)「例示」の三つに分けられている。この(イ)の場合だけを採用した。

(2)声喩――波多野氏は『文章心理学』の中で声喩に関して次の様に述べておられる。

「声比（声喩）は、必ずしも音のあるものをそのまま言話的声音にあらわすのではない。ホヤホヤ、のうのう、スタスタのように音のない姿態が充分声比的表現を受けるのである。」

これをメヤスとして、声喩を数えた

「お滝の手はぶるぶる顫へ出した」

「岩にぴたぴた吸ひついた」

『温泉宿』に出てくるものを、最初からあげてみた。（傍点は私がつけた）即ち「ごくごく」、「ねばねば」のように擬声語や擬態語の表現である。

なお、「膝頭をきゆつと合せた」「ガタンと音がした」の類は、採用しなかった。統計上の便宜上の理由つまり目で拾いやすいという事により、二語重ねたものを採用することにした。

(3)会話文――会話の量、即ち会話文のセンテンスの数を調査した。会話のとりかわされた回数ではない。

尚、本能的に発せられたものは前後の文から判断して含めなかつた。

省略の例を『十六歳の日記』からあげると、

「うううん、うううん。」と苦しい声が次第に高くなる。

(4)色彩語――「赤い袱紗」、「桃色のちりめん」、「白い千羽鶴の風呂敷」のような色彩に関することばである。安本氏は色彩語に関して

「統計にあたつては、白痴、青年、金時計などは、色彩語として数えなかつた。これらは、直接、色と関係があるとは、考えられないからである。また「深い悲しみの色」なども色彩語として数えなかつた。……具体的に、はつきりと「白」「赤」「青」などの色名が用いられたばあいだけを数えた」[6]

と述べておられる。しかし右の文で問題になるのは、金時計の例である。これらは明らかに金色という色彩を示している。単に「時計」としても意味はわかる。このような場合作者が、高価な時計という事に注目している場合と推定される。しかし、色そのものに作者が注目していると判断される時は、「金時計」も色彩語として彩用する事にした。また「赤いフランネル」のように修飾語として用いられた時、あるいは「白萩」のように熟語でも色彩をあらわしている場合は、採用した。

「雪」「霰」は白という色彩そのものをしめす語であるが、「雪」は白いという色感の方が先にでてくるが、「霰」は、音感の方が色感より強い。こういう語は採用しなかつた。

(5)文の長さ――文章は各段の「完全な文章」とする。完全な文章とは、その段において書き出しがはじまり、「句

点」が存在するものをいう。★ただし次の文章はふくめない事にした。

Ⅰ、会話体の引用のあるもの

そのうちに、私が勝つてゐた碁を負けてしまつたのだが、紙屋は

「いかがですもう一石、もう一石願ひませう」としつこくせがんだ。

Ⅱ、会話文でなくとも「　」の引用のあるもの。

この「売価」と「修身教科書」とが、一つになつた危つかしさは、彼女の小憎らしい魅力だつた。

Ⅲ、ローマ字綴を含んだ文

Ⅳ、引用句が箇条書きになつているもの、

(6)過去止、現在止、不定止――文の長さと同様にその段で始まり句点が存在する文章を対象としたが、会話文、引用文がある場合にも採用した。次のように、

「押入に、隠れたのよ。女中さんちつとも気がつかな★いで」

というような文章は最後のセンテンスの文末を対象にした。

「ねえ、すみません。この人を帰して下さい。帰して下さい。」とひたむきな高調子で責め続つて来た。

★右のような「会話文」＋「地の文」からなる文章は、地の文の最後を対象とした。過去止は文の最後が、「……であつた。」というような過去止で結ばれているもの。現在止は文の最後が「……である。」という現在止で結ばれているもの。★不定止のうちわけは、体言止、副文止、「行け」などの命令形、疑問の意味をあらわす助詞、「の」「わ」「よ」などの感嘆、感動の意味をあらわす助詞で文の最後が終るものとする。

川端の文章には、歴史的現在が目立つが（この事はすでに波多野氏が『文章心理学』において指摘されている。）この調査にあたつては、主観がともないがちなので、客観的に形式の上からのみみて、あらたにその項目をもうけなかつた。

(7)句点――「。」のほかに、★疑問符「？」感嘆符「!!」を含めた。

(8)名詞――★「休憩時間」「踊子一同」は一語として数え、「入江の細君」の場合は二語として数えた。

名詞の中には、★形式名詞、代名詞も含めた。

(9)人物――「彼」「私」「駒子」「子供」など人物に関する語の事である。

各項目を一々調査してゆく際、たまに抽出された段、あるいは五〇字の範囲にとどまらず、次の段、次の字数にわたつて、はじめて意味をなすものがあつた。例えば「赤い袱紗」の「赤い袱」だけ、「駒子」の「駒」「あか」の「あ」だけその範囲に含まれている場合、統計の場合はこれらはすべて半分の比率で採用した。

(六)(一)～(四)の方法により調査した結果の資料の抜萃は次の通りである。

表　Ⅱ

標本 ＼ 項目 ＼ 時期	抽出各段悉皆調査				抽出各段での最初の文章についての調査				抽出各段での最初の50字についての調査				
	直喩	声喩	会話文	色彩語	文の長さ	過去止	現在止	不定止	漢字	句点	読点	名詞	人物
前　期	21	20	138	5	698	11	5	4	279	40	36	139.6	42
中　期	19	3	229	22	686	11	2	7	301	41	39	151.5	30.5
後　期	8.5	2	179.5	11	558	10	4	6	295	47	45	141.5	57.5
雪　国（安本氏）	43	4	260	23	708	8	1	11	261	57	33	139	28

※　直喩に関しては、『雪国』において安本氏の調査では43磨井のでは19でその半分にみたない。
これは、直喩に対する解釈のちがいとおもわれる。
以下他の作家との比較に際しては、安本氏の調査では43であるという事を考慮して行なう。

五、㈠各母集団での標本における A.B.C. 各因子得点について、
第二表に示した使用率を標準尺度の式にあてはめてみよう。

A因子

「名詞」「漢字」「人物」の標準尺度値

$$名詞の標準尺度値 = \frac{10\,(Xi - 147.17)}{15.17} + 50$$

$$漢字の標準尺度値 = \frac{10\,(Xi - 325.72)}{53.17} + 50$$

$$人物の標準尺度値 = \frac{10\,(Xi3 - 39.51)}{9.90} + 50$$

Xiは各作家のそれぞれの項目の使用率を示す、三つの項目の標準尺度値の合計を算出し、それを「3」で割つて、この安本氏の式に以上調査したそれぞれの項目の使用率をはめてみる。

B因子

「色彩語」「声喩」「直喩」の標準尺度値である。

$$色彩語の標準尺度値 = \frac{10\,(Xi - 13.69)}{9.59} + 50$$

$$声喩の標準尺度値 = \frac{10\,(Xi - 12.02)}{8.32} + 50$$

$$色彩語の標準尺度値 = \frac{10\ (Xi - 26.68)}{13.41} + 50$$

A因子の得点の場合と同じように第二表のそれぞれの項目の使用率をあてはめて算出する。

C因子

「会話文」「句点」の標準尺度値

$$会話文の標準尺度値 = \frac{10\ (Xi - 149.13)}{84.78} + 50$$

$$句点の標準尺度値 = \frac{10\ (Xi - 37.62)}{9.24} + 50$$

A、B因子と同じように「会話文」「句点」の使用率を第二表からあてはめて、算出する

（以上、各因子とも計算過程は略す）

以上の計算によつてもとめられた各因子得点を表にするとつぎのようになる。

表　Ⅲ

因子／項目／時期		A 因子			B 因子			C 因子	
		名詞	漢字	人物	色彩語	声喩	直喩	会話文	句点
前期		44.944	41.213	52.513	40.938	59.591	45.764	48.687	53.225
	平均	46.22			48.76			50.96	
中期		52.854	45.351	40.899	58.665	39.159	44.273	59.421	54.307
	平均	46.37			47.37			58.86	
後期		46.262	44.222	68.172	47.195	39.957	36.443	53.582	60.801
	平均	52.89			40.53			57.19	
全平均		48.49			45.55			55.00	

表　Ⅳ

因子／項目／時期		A 因子			B 因子			C 因子	
		名詞	漢字	人物	色彩語	声喩	直喩	会話文	句点
中期		139	261	28	23	4	43	260	57
	平均	40.26			60.51			67.37	

安本氏統計

ただし、B因子は『文章心理学の新領域』　第一表をもとに磨井統計

(二)以上算出した川端の文章のA、B、C各因子得点が、安本氏の調査になつた現代作家の因子得点表に比較し、大きいか小さいかをみ、川端の文章の前期、中期、後期を吟味しようと思う。

第三表をみると、A因子は後期になるにしたがい得点は、増加し、B因子は後期になるにしたがいその得点は、減少の傾向を示し、C因子は、後期になるにしたがいその得点は増加している。

しかし増減の差は、わずかである。第三表により川端の作品は、そこに多少の得点の相違は、みられるが、安本氏の統計になつた『雪国』と、文章の性格においては、前期作品も、中期、後期の各作品もA因子の低い、B因子、C因子の高い文章という事がわかる。

川端は、『末期の眼』(昭和八年)において、

「私は常に文学の新らしい傾向、新しい形式を追い、また求める者と見られている。新奇を愛好し、新人に関心すると思われている。ために『奇術師』と呼ばれる光栄すら持つ。」

と述べているが、文章の性格においては、処女作『十六歳の日記』から『山の音』に至るまで、用言——修飾——会話型の作家という安本氏の判定通りになる。即ち川端の場合『雪国』一篇で、他の作品の文章上の性格を代表している。川端自らいう「奇術師」ということばも、文章上の性格からは、虚名にすぎないという事になる

おわりに

統計的手法を用いるにあたりいうまでもない事であるが、調査規準の確立が大切な事を痛感した。そうした意味で、卒業論文前半の、主に方法論の要約におわつたが、A〜C因子以外の各項目についての比較、あわせて川端の文体に対する従来の評価との関係を吟味することにより、またたちがつた面から川端の文体をみることが出来た。しかし本稿では、紙面の都合上、深く文体そのものに触れえなかつたことは、残念である。

注

1. 安本美典の「文章心理学」の引用である。(講現代語ら『文章と文体』明治書院)
2. 安本美典著『文章心理学の新領域』に付録として納められている。『文章の性格学への基礎的研究』の事である。
3. ここでいう発表年代は作品の発表の終つた年の事の意味。
4. 西平重喜の『統計2——標本調査法』培風館版を参考にする。
5. 久山善山編『対照国文法表』(中央図書の頁十九による。)
6. 『文章心理学の新領域』頁五二を引用した。
7. 紙面の都合上略したが、ぜひ『文章の性格学への基礎的研究』の因子得点表を参照していただきたい。

参考文献
文章心理学の新領域　創元社　安本　美典
文章心理学　新潮社　波多野完治
現代文章心理学　新潮社　波多野完治
統計2：標本調査法　培風館　西平　重喜
文章と文体　明治書院　講座現代語5
川端康成　角川書店　近代文学鑑賞講座十一巻
その他

竹取翁歌と漢籍との関係について

山本峯子

まえがき

萬葉集巻十六の竹取翁に関する一連の歌に漢籍の影響が見られることは、既に先学諸家の指摘されている所でもあり、今更改めていうまでもない。この有由縁歌は、序文、長歌、及び反歌、並びに娘子等和うる九首の歌から成つているが、この一連の作品と、漢籍、漢文学との関係について、改めて少しく検討を加えてみたいと思う。

一、序　文

序文が遊仙窟を背景に成立していることは、今日もはや疑いないことであるが、以下、先ず序文と遊仙窟との文章を列挙対照しながら論を進めていきたい。

(1) 忽値煮羹之九箇女子也。　（萬）
従来巡遶四辺。忽逢両箇神仙。（遊）

これは、翁が偶然九人の美しい仙女に会つたということなのだが、「忽値」「忽逢」等は、遊仙窟その他神仙物語等の漢籍によく用いられているようである。

所で、こゝで何故に九人の娘を出しているのであろうか。竹取翁の作者は、萬葉集評釈の窪田氏も述べられている如く、神仙思想に於て貴ばれる九箇という数字を当てはめる事により、遊仙窟等に見られるような神仙的雰囲気を造り出そうとしたのではなかろうか。更に、「九箇女子」の「九箇」と「忽逢両箇神仙」の「両箇」については、従来未だ何の見解も出されていないようであるが、「九箇女子」とはいうまでもなく九人の女の子のことを表現しているものであり、従つて、「九人の女子」でもまた「九」だけでも差し支えないはずであるがこの場合、「九」や「九人」ではなくわざ〳〵「九箇」と書かれているのは、やはり遊仙窟にある「両箇」が作者の頭の中に働いて「九箇女子」となつたのではなかろうか。

(2) 百嬌無侍花容無匹　（萬）